

潮汕における伯公信仰の宗教施設と祭神

顧 涵悦

はじめに

潮汕地域は、古代においては主に粵東・贛南・閩南の一部を含んでいたが、現在では主に潮州市、汕頭市、揭陽市の管轄区域を指す。潮州、汕頭、揭陽は地理的に隣接し、伯公廟は多く見られる。伯公は、大伯公、福德正神、本頭公、土地伯公、伯爺公などとも呼ばれ、潮汕において祭祀の対象とされている神である。

伯公信仰は、初期には江西省・湖南省などに見られたが、その後、徐々に広東省・福建省および台湾へと伝播した。さらに、この信仰は東南アジアにも広がり、シンガポール、マレーシア、タイなどの華人社会においては伯公廟が広く建立されている。伯公の神格が多面的であること、ならびにその信仰圏が広範に及んでいることは、伯公信仰が極めて強靱な生命力を有することを示している。

伯公信仰に関する研究は、日本、中国、マレーシア、シンガポールの四か国の研究者によって多くの成果が蓄積されている。代表的な研究としては、日本において窪徳忠¹、二階堂善弘²らが、伯公に関する様々な議論を総合的に整理するとともに、東南アジア諸国における伯公の呼称の違いについても論じられている。中国においては、饒宗頤³および許雲樵⁴が、伯公を特定の地域または民系に特有の呼称として捉える傾向を示している。夏遠鳴⁵は、梅州地域の伯公信仰を「福德伯公」「自然崇拝に由来する伯公」「特定の場所を守護する伯公」「職業に関連する伯公」の四類型に分類しており、この分類は張佑周⁶が閩西地域の伯公信仰を検討する際にも確認され

¹ 窪徳忠、『道教とアジアの宗教文化』、第一書房、1999 年、319-320 頁。

² 二階堂善弘、『東アジアの華人廟と文化交渉』、関西大学出版部、2020 年、19-21 頁。

³ 饒宗頤、「談伯公」、『南洋學報』（第八卷第二輯）、1952 年、27-28 頁。

⁴ 許雲樵、『馬來亞叢談』、青年書局、1961 年、53 頁。

⁵ 夏遠鳴、「梅州地區伯公述略」、『客家文博』（01）、2012 年、15-21 頁。

⁶ 張佑周、「試論客家民間信仰の傳承與發展」、『龍岩學院學報』（第 28 卷第 5 期）、2008 年、89 頁。

ている。また、マレーシアおよびシンガポールにおいては、許原泰⁷、高偉濃⁸らによって、一部の伯公が現地先住民を由来とする可能性が指摘されている。

伯公信仰はきわめて大きな体系を成しており、筆者もこれまで一連の研究として継続的に取り組んできた。「潮州と汕頭における伯公信仰考」では、潮州・汕頭地域における現在の伯公信仰には主神が明確でないという問題が存在することを指摘した⁹。すなわち、伯益と福德正神がいずれも伯公と呼称されており、人々が祀られる伯公を必ずしも認識していない点である。また、中原から潮汕、閩南から潮汕へと至る移民の歴史的経路を整理し、この混同が生じた背景について考察を試みた。

さらに「潮州における伯益信仰の源流と変容」では、潮汕地域の伯公の一つである伯益に注目した。中原地域における伯益信仰には、祖先神・英雄神・虫神・山神の四形態が確認され、古くから山東・河南・山西一帯に広く分布していた。中原から潮州へ移住する過程では、このうち英雄神と山神としての神格が保持されたと考えられる。しかし、祖先神としての神格は史料が乏しいため、潮州に伝わったかどうかを確定することは困難である。また、虫神としての神格は受け継がれなかった。加えて、潮州が山を背負い海に面する地理的環境を有することにより、伯益には水神としての神格が新たに付与され、福德正神との混同を通じて社神の神格も帯びるに至ったと考えられる¹⁰。

以上からは、伯公信仰を検討することは、すなわち伯公の地域的偏差を考えることに等しいという帰結が得られる。ここで難しいのは、既存の民系理論によって東南アジア各地の伯公信仰を大まかに分類することは可能であるものの、それを潮汕地域に適用することができない。これまでの研究によれば、潮汕地域の伯公信仰はおおよそ伯益祭祀圏と福德正神祭祀圏に区分される。ならば、潮汕を中心とする伯益祭祀圏はどこなのか。また、福德正神祭祀圏はどこなのか。さらに、両者の祭祀にはいかなる特徴が見られるのか。これらの問いについて本稿では、主に宗教施設と祭神に着目しつつ、大まかな見通しを与えることを試みたい。潮汕地域には伯公廟が無数に存在するため、悉皆的な把握は困難である。そこで、潮州・汕頭・揭陽

⁷ 許原泰、「論新加坡道教信仰の起源」、『宗教學研究』(01)、2011 年。

⁸ 高偉濃、「東南亞華人大伯公與土地崇拜探析——以泰國為例」、『海外華人研究論集』、中國社會科學出版社、2002 年、313-316 頁。

⁹ 顧涵悦、「潮州と汕頭における伯公信仰考」、『東アジア文化研究科院生論集』(14)、2024 年、77-89 頁。

¹⁰ 顧涵悦、「潮州における伯益信仰の源流と変容」、『東アジア文化交渉研究』(18)、2025 年、273-283 頁。

の三地域に現存する数十の伯公廟を対象として実地調査を行い、各地の典型的と思われる事例をとりあげ、今後の重点的な調査のための論点整理を行うのが本稿のめざすところである。

一、伯公とは

伯公信仰が現在も盛んに存続している潮汕地域に関する考察は、これまで著しく不足してきた。饒宗頤は、伯公について次のように述べている。

伯公は粵東地方の民間においてきわめて広く流行しており、客家に限られるものではなく、一般的な土地神の通称である。各県に属する廟はいずれも同様に、家ごとに土地福神を祀り、墓所においても土地神すなわち后土の神を併せて祀る。各郷・各村には必ず土地廟が存在し、総称して「福德廟」あるいは「福德祠」と称され、とりわけ農村部において普遍的に見られる。南洋における大伯公廟もまた「福德祠」と称され、その呼称はまったく同一である。潮州地域に属する土地福神の廟においても、「伯公廟」と称される例が存在する。

……「伯公」とは、郷里の習俗において年長者を敬って用いる尊称であり、粵俗の想像における土地神は、白髪に鬚をたくわえ、慈祥な表情をもって人々に福をもたらす存在とされることから、福德神とも称される。南洋における大伯公の神像を観察すると、潮州人が崇拜し描写する神像と何ら差異は認められない。現在、南洋各地で流通している伯公像の多くは、広東省仏山鎮で制作・販売されたものであり（大小二種があり、商標には「大京」「小京」の別がある）、また土地伯公像とも称される。毎年、南洋の商人が広東に来て大量にこれらを購入している事実からも、珠江流域一帯においても伯公、すなわち土地神が祀られていることが知られる。したがって、「伯公」への崇祀は、客家に特有のものではないことが明らかである。「伯公」に「大」の字を冠するのも、また一種の尊称にほかならない¹¹。

¹¹ 饒宗頤、「談伯公」、『南洋學報』（第八卷第二輯）、1952 年、27-28 頁。「伯公在粵東民間流行甚廣，不專限於客家，乃一般土地神之通稱…（中略）…又名土地伯公像，每年南洋商戶來粵採購甚多，是珠江一帶亦祀伯公，亦即土地神，故知對「伯公」之崇祀，非特客家為然也。伯公而冠以「大」字者，亦為尊稱……」

饒宗頤は「伯公」を「土地神」として位置づけ、南洋地域における大伯公は、粵東地域で広く信仰されている伯公、すなわち福德正神に相当すると論じている。土地福神を祀る人々は客家人に限らず、各県・各郷に福德廟または福德祠が建立され、家々で崇拝されている。しかし、潮州地域においては、土地福神廟が「伯公廟」と呼ばれる場合もある。

これを受けて許雲樵は、なおも南洋において祀られている大伯公を基盤とし、その神格を中国の土地神であると補論している。その根拠は以下の三点にまとめられる。

(一) 南洋各地で大伯公を祀る廟は「福德祠」と呼ばれ、中国における土地廟も同様に「福德祠」と称される。(二) 土地公は各地に必ず存在する神であり、一つの地域に複数の土地堂が存在する場合も少なくない。これに対し、城隍廟は一県につき一座に限られるのが一般的であり、大伯公廟もこれと同様の性格を有する。例えば、シンガポールには城隍廟が柏城街に一座存在するのみである一方、大伯公廟は十数座確認されているが、土地廟は一座も存在しない。(三) 広東の客家地域では土地公を「伯公」と称しており、当地における大伯公は性格上、土地公と同一であり、名称上「大」の字が付されているに過ぎない¹²。

しかしながら、饒宗頤と許雲樵はいずれも、「伯公」を特定の地域または民系に特有の呼称として捉える傾向が強く、伯公信仰の全体像を十分に把握しているとはいえない。そのため、伯公と福德正神との対応関係を論じる際には、しばしばその関係を単純化あるいは平板化して理解しており、伯公信仰が本来有する地域的差異や多様性を十分に浮き彫りにするには至っていない。

二階堂善弘は、潮汕地区の伯公信仰に伯益と福德正神の二人の伯公があると指摘する。この原因は、まずは呼称において、異なる神様の呼び方に明らかな違いがなく、「伯公」の使用頻度が高いため、混乱していることを論じた。また神像の上で、伯益と福德正神はいずれも白髪の老人の姿で現れ、紛らわしいと指摘し、最後に、伯益は特定の地域で土地神として実際に祀られていた可能性が高いと主張する¹³。

¹² 許雲樵、『馬來亞叢談』、青年書局、1961年、53頁。「(一) 南洋各地奉祀大伯公的廟叫做福德祠……只是名稱上多一個‘大’字而已。」

¹³ 二階堂善弘、「感天大帝考」、『近現代中華圏における芸能文化の伝播・流通・変容』、好文出版、2024年、172-174頁。

『石窟一征』は、清代広東省梅州の客家地域における風俗や人情を研究する上で重要な著作であり、光緒年間に編纂された『鎮平県志』に相当するものと見なされている。この中には、神としての立場で現れる「伯公」という語に関する最も早い解釈が見出される。民間において土地神が通常「伯公」と尊称されることについて、この称号は郷里で年長者を敬う呼び方に由来するのではなく、隋代の蕭吉による『五行大義』の記述に基づいていると考えている。それによれば、「天禽星宿」は八卦における坤の方位に位置し、別名を「子公」と称する。天禽星の正式名称は「執慶剛昱天禽廉貞綱星」であり、略して「廉貞星」、字を「子公」といい、五行では「土」に属する。土は万物を生み出す根源であり、中宮は遁甲において元帥が居る場所であるため、これは吉兆をもたらす星とされる。したがって、「子公」こそが土地神の原初的な称号であることが証明できる。後代に「伯公」と呼ばれるようになったのは、「伯」という字が爵位の序列において「子」よりも高く、土地神をより高い存在として尊崇するためであったと考えられる。なお、廟の名が「福德」とされる理由については、『遁甲経』に「善を積む者は自ずから福報を得、悪をなす者は必ず禍を被る」と記されており、そこには明示的に「悪を除く」とは書かれていないものの、「福德」という語には災厄を除き、厄を解くという深い意味が含まれている¹⁴。

しかし、各種文献を通覧しても、「子公」が土地神の通称として用いられた事例は極めて稀である。古代における土地神信仰は、農作物の豊穰を祈願するのみならず、戦勝祈願、災厄の除去、境域の守護といった宗教的機能をも兼ね備えており、民衆にとって重要な信仰対象であった。爵位の序列においては、「公・侯・伯・子・男」の順があり、「伯」は「子」より上位に位置する。黄釗は、「子公」の呼称が後に「伯公」へと転化した理由を、「伯」が「子」よりも尊貴であることに求めるが、これをもって土地神への尊称として「伯公」が成立したと断ずるのは、やや牽強附会の感を否めない。仮に尊称の強化を意図するのであれば、「伯」よりもさらに上位に位置する「侯」を用いて「侯公」と称してもよいはずである。このように見たとき、黄釗の説は一つの見解に過ぎず、その妥当性については慎重な再検討を要するものと言えよう。

その源流をたどると、「伯公」の「伯」という字について、『康熙字典』によれば、「伯」は本来「年長者」を意味し、たとえば父の兄を「伯父」と称するように、兄長の意を持つ。また、古代においては長子が家政を司る慣習があり、「伯」はしば

¹⁴ 黄釗、『石窟一征』巻四、學生書局、1970年、193頁。「俗以土地為伯公……言福德而除惡之意在其中矣。」

しば長兄・家長の役割を示す称としても機能した。さらに、「伯」は姓としても見られ、春秋時代には伯宗や伯州犁といった人物が歴史に記録されており、これらはいずれも伯益の後裔とされる。加えて、「伯」は「陌（野道）」と通用する例も存在し、たとえば『史記』には「伯格長」という語が登場し、これは田野の道路を管掌する村官を指すと解されている¹⁵。

このように、これら三つの語義は、「伯公」という称号の成立と深く関係している。第一に、「伯」字は尊称としての用法を持ち、民間でも広く使用されていた。

『石窟一征』には、村落における結社活動において、首領が「大伯」と呼ばれていたことを示している¹⁶。また、夏遠鳴によれば、清代に梅県石扇より南洋へ渡り、蘭芳共和国を創設した羅芳は「羅芳伯」と尊称されており、「伯」字が人名の後に付す尊称として機能していた例である¹⁷。さらに、民間信仰においても「風伯」や「河伯」のように、「伯」字は神格を有する存在への尊称として用いられている。

第二に、伯公の主神の一つとして祀られる伯益は、大禹の治水に貢献した功績によって神格化された人物であり、潮汕地域においては極めて重要な神祇として信仰されている。

第三に、「伯」が「陌」と通じる点が注目される。「陌」は田野や街道の小道を意味し、この語義は、土地神としての伯公の性格と密接に関係している。すなわち、いずれにおいても、人の居る場所には必ず伯公廟が設けられ、その庇護のもとに生活が営まれている。伯公は、一定の小区域を守護する神格として存在し、その役割は地域の行政長官にも似ている。この点からも、「伯公」を「陌公」として理解する方法が論理的整合性を有すると考えられる。

以上を総合すると、「伯公」という神明称号において、「伯」字は一方で民衆による尊称の意味を持ち、他方で「陌」と通じて土地との関係を強く示すものである。こうした語義の重層性が、「伯公」という称号の成立に深く関与していると考えられる。

今までの研究や関連史料を踏まえると、潮汕における伯公信仰は、単純に土地神と同一視できるものではないという帰結が得られる。当地においては、伯公は権威

¹⁵ 張玉書、陳廷敬編、『康熙字典』「子集中」「人部 四画 五画」、中華書局、1958 年、6 頁。「《説文》長也。《釋名》父之兄曰伯父。伯，把也，把持家政也。……又姓。益之後。春秋時有伯宗，伯州犁。又同陌。《史記・酷吏傳》置伯格長。《注》言阡陌村落皆置長也。故云九伯也。」

¹⁶ 前掲黄釗、『石窟一徵』卷一、50 頁。「今邑中結盟拜會，為首者曰大伯。大伯者，大哥之謂也。」

¹⁷ 前掲夏遠鳴、「梅州地區伯公述略」、18 頁。

のある存在として理解されており、その姿や役割は、方言による呼称や長年にわたり語り継がれてきた説明の影響を受けつつ、土地神と結び付いてきたものとみられる。さらに、地域社会における実際の信仰においては、一般的な土地神よりも、より信頼され、威厳を備えた神の存在が求められる場合が多いという傾向が見られる。

二、潮汕における伯益祭祀圏

東南アジアにおける伯公信仰の研究において、片岡樹はタイおよびその周辺地域にみられる本頭公祭祀を対象とし、神像・称呼・対聯に基づいて二つの類型に区分している。すなわち、バンコクにおいて最も頻繁にみられるのは甲冑姿の若い武人像であり、その他の地域においては元宝を手にした老人の土地公像である。バンコクの廟の多くが潮州系に属すると考えられていることから、この違いは、潮州人が多数を占めるバンコクと福建人が多数を占めるマレー半島との民系の差異を反映している可能性がある。また、両者が混在する地域については、二つの祭祀圏が重複領域として理解することができる¹⁸。

しかしながら、このような考え方をそのまま潮汕地域に当てはめることには限界がある。源流から見ると、タイの本頭公信仰と潮汕の伯公信仰は同じ起源を持っており、潮汕地域においても神像や呼び方によって二つに分けることができる。一つは宝剣を持ち虎を踏む若い武人の姿で、すなわち伯益であり、もう一つは元宝を持つ白髪の老人の姿で、すなわち福德正神である。一方で、タイの場合とは違い、潮汕地域ではこれらを民系によって分けることはできない。いわゆる潮州系とは潮州・汕頭・掲陽の三つの地域、すなわち潮汕を指しており、この地域では伯公は若い武人の姿だけでなく、福德正神の姿も広く見られる。したがって、民系による分類は、潮汕地域の伯公信仰の違いを説明するには十分ではない。そのため、別の視点からその差異を捉える。

したがって、潮汕地域における二つの伯公の祭祀圏を区分する必要がある。伯公の神格は、宗教施設および祭神のあり方に着目することによって判断することができる。潮汕において一般的にみられる伯益を祀る伯公廟では、神像に剣と虎の要素

¹⁸ 片岡樹、「神々の落地生根——タイ国とその隣接地域における本頭公祭祀」、『華人華僑研究』22号、2025年、32-33頁。

が見られることが多く、対聯には伯益の功績が記され、扁額には「感天大帝」と記されるのが通例である。また、祭祀は旧暦三月二十九日に行われる。

【事例 1】潮州市湘橋区の北園路と園林路の交差点付近に位置する上埔伯公宮は、歴史が悠久であり、清代乾隆年間に創建され、壬寅年に再修された小規模な廟である¹⁹。「感天大帝」と記された提灯が掲げられ、「百虫將軍」の壁画が描かれている。また、本廟では毎年旧暦三月二十九日の「伯公誕」に伯公を祭る儀礼が行われ、その前夜には戯班を招いて戯曲を奉納する。2023 年には澄海隆都の玉春香グループによって紙影戯が上演された。

【事例 2】潮州市潮安区の龍湖古寨内に位置する龍湖寨感天大帝廟は、極めて簡素で、二軒の家屋の間の通路上に設けられている。神像は伯益の姿をしている。

【事例 3】汕頭市澄海区の 231 省道から東へ 50 メートルの地点に位置する感天大帝廟は、主神を感天大帝とし、黒髪の中年男性の姿で、手に剣を持ち虎を踏みつけていることから、伯益であると断定できる。左右には配祀として福德正神とその夫人が祀られている。廟内には伯公符の配布箱が設けられており、靈符の上部には「鳳山伯爺」、下部には「勅令感天大帝」と記されている。

符の使用範囲は広く、人を治療するためにも用いられる。すなわち、朱砂で書写した符を焼いて灰にし、その灰を水に溶かして患病者に飲ませる方法である。また、鬼を鎮めるために、身に携帯したり家に貼ったりする用途もある。潮汕は民間信仰が盛んな地域であり、この伯公符もまた、感天大帝に鬼を討伐させて家族の安寧を願うという当地人の素朴な願望を反映している。

【事例 4】汕頭市金平区の護堤路 47 号に位置する大窖伯公廟は、市中心部の梅溪西岸に建てられている。この地域は「窖」と呼ばれ、さらに三山国王廟があることから「大窖」の名が付いた。地元住民によれば、この廟は清の咸豊年間（1851～1861 年）に創建されたとされ、約 170 年の歴史を有する。20 世紀前半、特に 1940 年代以前は社会不安や戦乱が頻発し、民衆の生活も困窮していた。そのため伯爺公廟は荒廃し、地域も修繕に手が回らず、次第に衰退していった。その後、1990 年に再建された。廟は約 2,000 平方メートルの敷地を有し、筆者が現地調査を行った数多くの伯公廟の中でも最大規模の祭祀場所である。廟の前には山門が設けられ、正門の扁額には「伯益殊勲」とあり、対聯には「襄禹紓災浩浩洪瀾疏入海，靖虞伏虎芸芸黎庶頼安懷」と記されている。これは、伯益が大禹を補佐して水害を鎮め、洪

¹⁹ 上埔伯公宮の碑により。「上埔伯公古廟、歴史悠久、始建於立村乾隆年間、重建於歲次壬寅。」

水を海に導いたことや、山林の守官として猛虎を制し、民衆を保護して安寧をもたらしたことを称えたものである。

廟に祀られている主神は伯益であり、白髪 of 老人の姿をしている。足下に虎を踏まず、手には剣ではなく、右手に棒、左手に金塊を持つなど、伯益を象徴する明確な特徴は見られない。その姿は福德正神と酷似しており、両者の違いは表情によってしか判別できない。この伯益像は、虎を伏せる威厳を今も備えているとされるため、表情は厳しく造形されているが、土地神である福德正神の像は一般により穏やかな表情をしている。廟内には多くの神が配祀されており、その中では関帝だけが識別可能である。

以上の事例が示すように、廟に祀られる伯公が伯益であることは明らかであるが、一方で、記録上は伯益とされながらも、祭祀の実態においては許遜と混同される場合がある。

【事例 5】潮州市潮安区の溜龍村に位置する溜龍村感天大帝廟は、主神として感天大帝を祀る。神像は白髪 of 老人で、金色の鎧をまとい、右手に剣を持ち、虎を踏みつける姿である。対聯「昔匡虞舜浚通河川輔社稷、今鎮溜龍調序風雨益禾田」によれば、本廟に祀られる感天大帝は、舜帝および禹帝に仕えて治水に功績のあった伯益とされる。しかし、「蛟龍を鎮め、風雨を調える」といった事績は、伯益本人のものではなく、同じく感天大帝と称される許遜の事績であると考えられる。

また、碑文に記された「咸豐癸丑年菊月」から、本廟は咸豐 3 年 (1853 年) の旧暦 9 月に再建されたことが判明する。当時の感天大帝が伯益であったのか、許遜であったのか、あるいは同様に潮汕地域で感天大帝と称される介子推であったのかについては、明確な史料は確認されていない。

配祀神として、右側には仙師公が祀られており、香炉に刻まれた「韓湘仙師」の文字から、これは八仙の一人である韓湘子であることが明らかとなる。左側には福德正神およびその夫人が祀られている。各神に対する対聯の内容からは、感天大帝が村の風雨を調べ農業の安定を担い、韓湘子が迷いを導き村民に正しい判断を促し、福德正神が平安を守護する役割を果たしていることがうかがえる。

【事例 6】潮州市潮安区の文里文西路文里村に位置する感天大帝廟の境内には、民間信仰に関する石碑が設置されており、その中には伯公宮や伯公廟の建立年代や主神に関する詳細な記録が見られる。

①西隴宮は東廈路に位置し、明代洪熙年間に建立された。敷地面積は八十平方メートル、建築面積も同じく八十平方メートルで、三間構えに拝亭を付した宮殿式建築であ

る。風水上の格局は「跳加冠」とされ、天地父母の神位、福德老爺およびその侍者の塑像を祀っている。

②感天大帝廟は西疇美に所在し、明代崇禎年間に建立された。敷地面積は八十平方メートル、建築面積も八十平方メートルで、単間構えに拝亭を付した宮殿式建築であり、風水格局は「跳加冠」である。堂内には天地父母の神位、感天大帝、侍者、福德老爺、その夫人および侍者、さらに白禧娘娘・乳娘などの塑像が奉安されている。

③福德廟は城南の景園に位置し、西暦 1240 年、謝壺山が郷を創建した際に建立されたものである。敷地面積は七十八・八平方メートル、建築面積は三十二・七平方メートルで、単間構えに拝亭を付した宮殿式建築であり、風水格局は「跳加冠」である。福德老爺およびその夫人の塑像を祀る。

④伯公宮は龍脊巷頭に所在し、明代に建立された。敷地面積は四平方メートルで、「坐獅式」の建築様式を有する。天地父母の神位、土地公および土地媽の塑像を奉祀している。

⑤沙池福德廟は沙池文亨路中段に位置し、元末に鄭氏が村を創建した際に建立された。建築面積は約三平方メートルで、「坐獅格局」を呈し、福德老爺およびその夫人を祀る。

⑥福德祠は溪頭の鄭橋頭に所在し、明代初期に建立された。敷地面積は百平方メートル、建築面積は二十五平方メートルで、「坐獅式」の建築である。天地父母の神位、土地神、土地媽および二体の侍者像を奉安している。

⑦伯公廟は文西路の烏門外に位置し、明代初期に建立された。敷地面積は三百平方メートル、建築面積は十五平方メートルで、「坐獅式」の建築様式を有する。天地父母の神位、感天大帝および二体の侍者像を祀っている。

⑧元天上帝廟は隴下東升路に所在し、清代に建立された。敷地面積・建築面積はいずれも六十八平方メートルで、単間構えに拝亭を付した宮殿式建築であり、風水格局は「跳加冠」である。堂内には天地父母の神位、元天上帝、感天大帝、福德老爺の塑像が奉祀されている²⁰。

文里村には明代に建立された二つの伯公廟が存在し、それぞれ龍脊巷頭と文西路烏門外に位置していた。前者には伝統的な土地神が祀られていたのに対し、後者には感天大帝が祀られており、当地では、伯公信仰における主神の混同が早期から見られる。

²⁰ 文里村感天大帝廟の碑により。

現在、村内に現存する伯公廟は、2014 年に再建された開濠蔡感天大帝廟のみである。一方で、村中の石碑には「感天大帝」は許遜であると明記されているが、廟の祭祀日は旧暦三月二十九日とされており、これは許遜の誕辰日である正月二十八日ではなく、むしろ伯益の誕辰日に相当する。この点は、許遜と伯益との混同を示している。

また、廟内には「伯公廟」と記された扁額が掲げられ、神龕に安置されている神像は、白髪 of 老人の姿で、手に宝剣を持ち、猛虎を踏みつけるという造形をしており、その姿は許遜というよりも、むしろ伯益に近いと考えられる。

許遜と伯益の混同は、贛商との関係に由来するものと考えられる。すなわち、中国の「十大商幫」の一つに数えられる江右商人は、元代から清代にかけて五百年以上にわたり繁栄を遂げ、中国商幫の中で重要な地位を確立した。江西を代表する神祇である許遜は、贛商にとって精神的象徴として位置づけられ、彼らは商業活動によって一定の資本を蓄積すると、各地に万寿宮を建立してその信仰を広めていった。

さらに、江西は広東と隣接しており、明清期においては、江右商幫が景德鎮や永興の陶磁器を贛江水系を通じて広東へ輸送したほか、潮州などで消費される綿花の相当部分が江西商人によって贛北地域から供給されていたとされる²¹。このような広域的交易の展開に伴い、許遜信仰もまた潮州へと伝播したとみられる。

この点については、すでに指摘されているように、潮州市文里村の碑文において明代に感天大帝廟が建立されたことが記されているほか、同村内の他の廟においても感天大帝が祀られている事実からも裏付けられる。こうした状況を踏まえると、許遜信仰の伝播と定着の過程が、伯益との神格的混同を生じさせる一因となった可能性が示唆されよう。

許遜との混同に加えて、伯益と福德正神が合祀される、あるいは福德正神と混同される現象もみられる。

【事例 7】汕頭市金平区の同平路 25 号に位置する道台伯公廟は、廟前の碑文によれば、この廟は清朝光緒年間（1875—1908 年）に建てられ、「文選胡同」にあり、当時の惠潮嘉道台（地方の高級官員）とその家族や随行者の住宅区に近い場所にあった。清の同治七年（1868 年）春、汕頭開港から 8 年後に政府は道台行署を設置した。初代道台は張銑（1825 年生、没年不詳）であり、彼は清廉で民に親しまれ、優れた行政功績を残したため、地元の人々は廟で夏代の舜、禹、啓の三帝を補佐した

²¹ 董馨、「潮汕地区之于粤闽赣的嵌入式发展」、『汕头开埠与华侨文化研究』、社会科学文献出版社、2021 年、143-144 頁。

伯益だけでなく、張銑も祀った。汕頭解放後、この廟は貧困者の住居に割り当てられた。約 1982 年には老朽化のため倒壊し、廃墟となった。1983 年に道台伯公廟が再建され、廟内には張道台の肖像画と香炉が祀られている。

道台伯公廟は 2025 年に再建された。新たに祭壇を設けて伯公を迎えるにあたっては、まず神意を伺い、その許可を得たうえで儀式の日程が定められ、さらに三日間にわたり戯曲が上演されて神に奉納された。道台伯公廟は歴史的に由緒ある廟とされているが、廟前の略歴は 2023 年に「広東省民間文化遺産救済プロジェクト」の専門家である林俊聡氏によって執筆されたものであり、その内容が口承伝説に基づくものか、確かな史料に依拠しているのかは判然としない。また、当廟は歴代にわたり幾度も修復されており、現存する建築自体の歴史はせいぜい数十年にとどまる。

碑文の略歴には、奉祀されている主神である伯公は伯益であると記されているが、廟内の神像は剣ではなく元宝を手にし、足下には虎を踏んでおらず、さらに夫人像が配されていることから、この像は伯益ではなく福德正神であると判断される。これは伯公信仰で主神が混同されている典型的な例と考えられる。

【事例 8】汕頭市金平区の福平路に位置する順興伯公廟は、主神として福德老爺を祀っている。配祀神は左より順に財神、南天門伯公、福德老爺夫人、孫悟空である。特に南天門伯公の像は、黒髪の中年男性で左手に剣を携え、足下に虎を踏みつける姿であり、その形象は伯益とほぼ一致すると考えられる。

帷帳	福德老爺						
扁額	南天門伯公		福德老爺			大聖仏祖	
神像	財神	伯益	福德老爺 夫人	福德老爺	福德老爺 夫人	福德老爺	孫悟空
香炉	南天門伯公				天地父母		

順興伯公廟の内部配置

当地の人々は、伯益が大禹とともに治水を終えた後に昇天し、玉皇大帝の命を受けて南天門を守る役目を負ったため、この称号を得たと考えている。しかし、この説は神仙体系の実際の設定とは合致しない。

【事例 9】汕頭市澄海区隆都鎮富洋村に位置する北洋感天大帝伯公廟は、主神として祀られているのは白髪 of 老人像であり、その像容の特徴から伯益と見なすことができる。配祀神は設けられていない。

【事例 10】揭陽市榕城区西関路 101 号に位置する西郊神樹伯公廟は、創建年代は明確ではないが、2007 年に再建された記録が残されている。廟名は、背後にそびえ

る樹齢 800 年以上と伝えられるガジュマルの古木に由来し、その由来は廟内の石碑『古喬外埠西郊神樹伯公廟記』にも記されている。この古木は幾度かの損傷を経ながらも現存し、西関廟や釣鰲橋とともに、地方の文化財保護対象に指定されている。

伝承によれば、かつて当地の水域において鰲魚が暴れ、船の往来に被害をもたらしていたが、仙人・呂洞賓が赤い縄でこれを釣り上げ、水上交通の安全を回復させたとされる。この故事に因んで、当該の橋は「釣鰲橋」と呼ばれるようになったという。呂洞賓の功績を讃えるため、本廟の背後には呂祖殿が増設され、現在でも信徒が香を焚き、祈願を捧げる場となっている。

さらに、廟を管理する理事会が作成した案内文によれば、神樹伯公の誕辰は旧暦三月二十九日とされ、これは伯益の誕生日と同日に当たるという。

本廟の内部には大型の香炉が設置されており、その銘文には左から順に、「北斗星君」「呂祖先師」「護法夫人」「護法老爺」「福德老爺」「感天大帝」「神樹伯公」「天地父母」「天后聖母」「財神老爺」「南辰星君」の名が刻まれている。

感天大帝神像は伯益の形象を呈しており、香炉刻文においても、福德老爺・感天大帝・神樹伯公が並列されている。このことは、土地神・伯益・樹神が合祀されるとともに、三者が人々の認識において同等の地位を付与されていることを示している。

上記の事例を総合すると、伯益祭祀圏は、おおむね潮州の湘橋区・潮安区南部、汕頭の金平区、揭陽の榕城区が形成する三角形の区域に位置していることがわかる。金平区と湘橋区を中心軸として、北西の榕城区方向に向かって広がる傾向があり、伯益と他の神が混同される現象が顕著で、多くは配祀される形態や福德正神との合祀の形態で現れる。



三、潮汕における福德正神祭祀圏

福德正神は自然崇拜に起源を持ち、閩人の南方移民に伴って中原から福建へと伝播した。潮汕地域において伯公の一つとしての福德正神を識別するにあたって、次の諸点が直観的な手がかりとなる神像の特徴としては、老人の姿で表され、手に元宝を持つ姿が多く見られる。対聯の形式としては、「福……／徳……」の句を冒頭に置くものが多い。配祀の面では、女性神明が夫人として合祀される場合がある。

【事例 11】汕頭市杏花村直巷と金沙西路の交差点に位置する大同伯公宮は、主神として伯公を祀り、配祀神として伯媽を併祀する。神像の形象に基づくかぎり、伯公は福德正神であると推測される。

【事例 12】汕頭市龍湖区の丹陽東街と丹陽東一街の交差点に位置する丹陽伯公宮は、主神として福德老爺を祀り、神像の左右にはやや小さめの伯公・伯媽の像が安置されている。配祀神は天后聖母である。

【事例 13】汕頭市金平区新厝大路東座六巷 1 号に位置する伯公古廟は、主神として伯公を祀り、配祀神として伯媽を併祀する。廟前に掲げられた提灯に「福德公媽」との文字が印されていることから、本廟における伯公は福德正神であると考えられる。神像の前方には二基の香炉が設置されており、それぞれに「伯公」「天公」

との刻銘が確認できる。配祀に伯媽を伴う他の伯公廟と異なる点として、伯媽像は手に扇子を持つという特徴が見られる。

【事例 14】汕頭市金平区の民権路に位置する埕頭伯公宮の主神は伯公であり、配祀神として伯公夫人が祀られている。伯公像は右手に龍頭杖を、左手に元宝を持つ姿で造形されており、神像前方に設置された香炉には「福德伯公」との刻銘が確認される。これにより、本廟の伯公は福德正神であると考えられる。

【事例 15】揭陽市榕城区の紹興路に位置する南湑古廟は、山門上には「福德祠」との扁額が掲げられている。廟内には「福德老爺座前靈籤」が貼られ、神龕正中に福德正神が安置されている。配祀神としては伯益および福德正神夫人が祀られる。

【事例 16】揭陽市榕城区の韓祠路に位置する韓祠伯公宮は、春節期間中は伯公像が紅布で覆われるため、神幔に記された「福德正神」の文字から主神を判断せざるを得ない。

【事例 17】揭陽市榕城区に位置する季雨南橋伯公宮は、主神として福德正神を祀り、その夫人を配祀している。さらに、天地父母も併せて祀られている。

【事例 18】揭陽市榕城区に位置する東門後溪墘伯公古廟は、山門前の楹聯には「福因土而益存、德配地以無疆」と掲げられている。供物台に置かれた香炉には「福德正神」と刻まれており、廟内には「福德老爺簽詩」も掲示されている。神龕内には二尊の神像が安置されているが、その容貌の詳細は不明であるものの、主神が福德正神であることは確実である。

土地神は神明体系において最も低い位に置かれており、通常は寺廟の中で配祀神として傍に祀られるか、あるいは「土地祠」と呼ばれる簡素な祠に単独で祀られるのが一般的である。しかし潮汕地域の伯公廟では、福德正神が主神として祀られる多神合祀の形態が見られ、しかもその配祀神には地位の高い神明が選ばれることが多い。

【事例 19】汕頭市金平区の光華路と西港路・富路の交差点南東に位置する光華伯公宮の主神は福德老爺であり、配祀神は左から順に、虎を踏む姿の趙公明、水仙龍爺、周倉、関帝、関平、天后聖母、観音菩薩である。これは、民間信仰・仏教・道教の神々が典型的に混在して祀られている例である。

神像	趙公明	関帝	福德正神	水仙龍爺	福德正神	周倉	関帝	関平	天后聖母	観音菩薩
供物台										
香炉	財神爺			福德老爺				天后聖母		

光華伯公宮内の配置

【事例 20】汕頭市珠池伯公廟は、龍湖区の興徳街と藍田街の交差点に位置する。主神は福德正神であり、配祀神としては將軍老爺などが祀られている。

神像	將軍老爺	福德正神	福德正神	福德正神	天后聖母
香炉	福德老爺 天后聖母 將軍老爺			天地父母	

珠池伯公廟内の配置

【事例 21】上記した北洋感天大帝伯公廟の隣接地には、廟名不詳の別廟が存在する。この廟は福德正神をはじめ複数の神祇を祀り、規模はより大きい。

神像		三王爺 三夫人	大王爺 大夫人	二王爺 二夫人	福德老爺 福德夫人	
		玄天上帝		神農		
	關帝					關帝
香炉	三王爺 三夫人		大王爺 大夫人		二王爺 二夫人	
	花公 花媽			福德老爺 福德夫人		

廟内の配置

【事例 22】汕頭市金平区の興華路 8 号に位置する杏花伯公宮は、梅溪に隣接している。主神は福德正神であり、配祀神は左から順に、龍尾爺の夫人、龍尾爺、伯公夫人、道教の装束をまとった仏祖二名、そして唐の至徳 2 年（757 年）に睢陽城を死守して安祿山の反乱に抗した潮汕出身の民族英雄、張巡と許遠である。廟内の配置は以下の表の通りである。

神像	龍尾爺・夫人	伯公・夫人	仏祖	雙忠聖王
香炉	玄天上帝	諸位福神	天后聖母	

杏花伯公宮内の配置

杏花伯公宮には、神々の生誕日を記した吉日表が掲示されており、その中で伯公の誕生日は旧暦の三月二十九日、地頭伯公の誕生日は旧暦の六月二十六日とされている。汕頭市金平区金砂郷にある金砂古廟を訪れた際にも、同様に神々の誕辰が掲示されているのを確認した。そこでは、旧暦三月二十九日に三角壠伯公および東門感天大帝を祭祀し、六月二十六日に金韓伯公、十月二十五日に南門伯公、三月十日には西門・北門・新厝の伯公を祭祀している。

これらの伯公が具体的に誰を指し、どのような基準で区別されるべきかについて考察する。前述のとおり、広東省における伯公は「その他の伯公」に分類され、さらに自然崇拜型、場所守護型、職業守護型の三類に細分される。杏花伯公宮および金砂古廟では、伯公の誕辰がいずれも旧暦三月二十九日および六月二十六日とされており、三月二十九日は伯益の誕辰とされる。一方、南門・西門・北門・新厝の伯公については、当地で創出された土着の神であり、場所を守護する伯公に属する可能性が高いと推測される。『石窟一征』において、民間では、旧暦六月初六を伯公の誕生日として広く認識している。伯公は土地神であり、古人の五行思想によれば、「土」は一年を通じて辰（春末）、戌（秋末）、丑（冬末）、未（夏末）の四つの時節の最後 18 日に分布している。とりわけ旧暦六月（未月）は、「土」が五行の中で「火」と「金」の間に位置し、年間の中心的な時期にあたるため、人々は六月を土地神の「誕生月」と考えている。『月令』には「中溜之祀」とあり、これは古代に「中溜」と呼ばれる土の神を祭ることを指す。蔡邕は『独断』において、夏の最後の月（土気が最も盛んな時期）に中溜を祭るべきであると述べている。また、注釈には中溜も土地神であると記されている²²。

なぜ六日選ばれたのかについては、『月令広義』に「六六は純陰の土の象徴であり、この日に土を動かすと大凶を招くため、土地神を祭るには最適の日である」と説明されている。

黄釗は、他の地域の土地神の誕生日がまちまちである一方で、五行理論に基づけば、梅州における旧暦六月初六こそが最も合理的かつ正統な選択であると考えている。

潮汕と梅州は隣接し、旧暦六月二十六日の伯公の誕生日は、土地神の神格を持つ福德正神の誕生日である可能性が高い。地域の慣習によって、日付に若干の違いが生じたものと考えられる。

【事例 23】汕頭市金平区の龍眼村に位置する龍眼村伯公廟は、他の伯公廟と比較して規模がやや大きく、参拝者も多い。廟内には神像は設置されておらず、神名が

²² 前掲黄釗、『石窟一徵』卷四、198 頁。

刻まれた香炉のみが存在する。「伯公廟」と称されているものの、神位の配置順に鑑みると、中央壇上には仏祖の神位が置かれ、その左右に、右側より順に將軍公爺、三山国王とその夫人、福德正神とその夫人の神位が並ぶ。本廟における伯公は福德正神であると考えられる。廟内の配置は以下の通りである。

將軍公爺	仏祖	三山国王 夫人	福德老爺公 福德老爺媽
供物台			

龍眼村伯公廟内の配置

【事例 24】揭陽市榕城区の西街に位置する清風亭大徳古廟の主神は大徳老爺（福德正神）である。像容は白髪で、右手に金塊を持ち、左手には杖を持たない。配祀神としては神農、花公、花媽が祀られている。

【事例 25】汕頭市金平区の汕漳路に位置する伯公伯媽廟の主神は土地神の姿をしており、福德正神であると考えられる。配祀神は伯媽である。ただし、伯公伯媽廟の歴史はせいぜい 20 世紀の 70 年代までしか遡れず、主神は他の地域から請われて村に迎え入れられたものである。主神の正体は不明だが、願い事がよく叶うため、参拝客は絶えない。

【事例 26】汕頭市龍湖区の黄山路 48 号に位置する珠北伯公宮の主神は福德正神であり、その神像は神壇の最右側に安置されている。配祀神としては関帝、媽祖、観音などが祀られている。

【事例 27】福合埕伯公宮は金平区の福平路 111 号に位置している。廟前の石碑によると、この廟は 1860 年に建てられたという。元の場所は、汕頭市開港後の鎮平路東側にあり、福合菱楚地区の住民たちが祈願のために訪れる廟であった。近くにはかつて水路があり、地元住民は港頭の位置に石で約 10 平方メートルの小さな廟を築き、神龕に伯公を祀ったことからこの廟が形成された。1960 年代には伯公宮の旧址で改修工事が行われ、1990 年代に移転された。その後も数回修繕されている。

この廟で祀られている伯公は福德老爺、すなわち福德正神であり、扁額には「玉皇上帝」と記されていることから、地元住民はこれを道教の神祇とともに合祀していることが分かる。廟の元の場所は水辺に近く、当初は社公壇の規模に過ぎず、住民が石を積み上げて作ったものであったが、その後徐々に規模を拡大し廟に発展した。

上記の廟には、玄天上帝・神農・関帝といった著名な道教神祇に加え、民間信仰における花公・花媽・王爺なども福德正神と合祀されている。伯益が別に廟を設けて単独で祀られている理由については、その由来の特殊性によるものか、あるいは他の神明より重要視されているためかなど、現時点では明らかでなく、今後さらなる検討を要する。

伯益と比べ、福德正神の祭祀は、日常の祭祀においても「伯公生」のような特別な祭日における儀礼でも、より盛大に行われる。潮州と比べて、汕頭と揭陽では民間信仰の雰囲気がいずれも濃厚であり、祭神儀式もとより豊かで、伯公信仰も鮮明に表れている。

【事例 28】汕頭市龍眼村の住民によれば、祭祀に先立ち、果物、菓子類、線香、蠟燭、紙銭などの供物を準備する必要がある。紙銭の一組には通常、小金、大金、大鈔、銀錠、福銭、大銭、好銭、説話銭、五土銭、青紅などが含まれる。供物は二組用意し、一組は天公に、もう一組は將軍爺および伯公などの神々に供える。

祭神の手順は以下の通りである。

(1) まず天公を拝する。火のついた線香と、まだ火をつけていない蠟燭を手に持って、ひざまずく。天公に願い事を述べた後、線香を香炉に立てる。次に蠟燭に火を灯して香炉に立て、再び跪いて三拝する。拝礼の際には、掌を上にして地面に置き、次に下向きにして再度地面に置く。立ち上がった後、両手を合わせて胸の前で前後に三回振る。この動作を一組とし、これを三回繰り返す。

(2) 次に將軍爺、伯公などを拝する。線香に火を灯して跪き、神々に願いを述べる。各神の香炉に三本ずつ線香を立て、さらに二本の線香を廟門の両脇に立てて門神を拝する。

(3) 線香がある程度燃えた後、紙銭を両手で頭上に掲げて三拝し、神々に願をかける。願いの形式は、神への呼びかけ（例：「伯公老爺保佑」）、供奉者の姓名、生年月日、現住所、願意、そして所願が達成される際の報謝内容から成る。

(4) 紙銭を火炉に投入して焼却し、焼き終えた後に再び三拝する。

(5) 供物は祭祀後に持ち帰るが、その前に各供物を三度上下に振って神に知らせるから回収する。

【事例 29】北城里伯公宮は榕城区の東環城路に位置し、北城里の福德老爺および夫人を祀っている。神像の造形は、他の福德正神像と比して若干の相違が見られ、手に金元宝や杖を持たず、白髪の老翁という点のみが共通の特徴として確認される。

廟前には掲示が貼られており、廟宇の由来や主神に関する来歴が詳細に記されている。それによれば、本廟は清代に創建され、1990 年代に再建された。当初は伯公

のみが主神として祀られていたが、その二年後に伯媽が配祀されるに至ったという。

民間説話において、城北里の伯公は、悪を懲らしめ、善を顕彰し、財を招き、子を受け、病を癒し、道を示すといった諸機能を有している。その起点はいずれも伯公が雨を司る能力を持つことにある。中華民族は水を聖なるものとみなし、人体の構成要素であるのみならず、水が生命および農作物の生育と密接に結びついていることを信じてきた。したがって、伯公が気象の調節を行い、特定地域に雨を降らせる能力を有するとされたとき、人々の水への依存感はその行為への崇拝へと転化し、伯公を地方神祇としての地位へと強化したのである。人びとの需要が拡大するに伴い、伯公の機能は次第に拡充し、医神・子嗣神・財神といった多様な神格を帯びるに至った。これは里人が当該信仰に功利性および実用性を深く期待していることを反映している。祭祀儀式においては、聖杯による卜占を行い、伯公の承認を得た上で当該日に決めるため、毎年、城北里伯公の祈り儀式の日程は固定されない。2025 年は旧暦正月十九日（2 月 16 日）と定められ、華陽觀の道長が来臨して神前にて経文を誦し祈福を行った。儀式は専任神職ではなく、信徒がお金を納めることで参加資格を得る形式を採用しており、以下の十種目が設定されている。

1. 伯公・伯媽神輿および香几の担ぎ手：計 36 名、1 名あたり 480 元、寄進金額に上限なし。
2. 財丁興旺大旗の担ぎ手：8 名、1 名あたり 380 元、寄進金額に上限なし。
3. 五峰旗の担ぎ手：5 名、1 名あたり 380 元。
4. 出巡羅傘の担ぎ手：4 名、1 名あたり 280 元。
5. 出巡彩楣の担ぎ手：4 名、1 名あたり 280 元。
6. 出巡牌・宮頭旗・馬頭羅の担ぎ手：10 名、1 名あたり 180 元。
7. 香炉・灯籠の担ぎ手：計 4 名、1 名あたり 220 元。
8. 彩旗の担ぎ手：12 名、1 名あたり 120 元。
9. 児童小灯籠の担ぎ手：12 名、1 名あたり 80 元。
10. 児童小獅子隊の担ぎ手：12 名、1 名あたり 320 元。

儀式の規模は大きく、参加者は百人を超える。伯公の巡回儀式は、信者に心の安らぎを与えるだけではない。もし日常の参拝が、伯公への敬意を示すと同時に、個人の願いをかなえるための行為だとすれば、集団で行う祭りには、同じ信仰を持つ人たちをつなぐ社会的な役割があると言える。こうした祭りは、地域に伝わる文化をみんなで確かめ合う機会となり、参加する人々の考え方や気持ち、行動を近づけていく。そしてそれは、社会のために貢献しようとする気持ちを育てる働きもしている。

上記の事例を総合すると、福德正神の祭祀圏は主に汕頭市および揭陽市を中心に分布していることが確認できる。一方、潮州では福德正神が伯公の称号で祀られることはほとんどなく、伯公廟ではなく福德祠に祀られる場合が多い。周辺地域に目を向けると、北の梅州では伯公が土地神として機能し、福德正神と同一視される場合も見られる。東の福建では伯公は複数の種別に分かれるものの、その機能は土地神と同様であり、福德正神とも呼ばれる地域も存在する。西の深圳においても、崗辺伯公廟に福德正神が祀られていることが確認されている。以上のことから、伯益の祭祀圏は福德正神の祭祀圏に包囲される形で分布しており、潮汕地域における伯公信仰の中核を福德正神が担っていると考えられる。

おわりに

本稿では、潮汕地域における伯公信仰を対象に、宗教場所および祭神についてのフィールドワークに基づく分析を行った。まず、東南アジアにおける伯公信仰の民系理論を潮汕地域にそのまま適用することの限界を明らかにしたうえで、潮汕における伯益祭祀圏と福德正神祭祀圏を新たに区分した。

伯益祭祀圏は、潮州湘橋区・潮安区南部、汕頭金平区、揭陽榕城区の三地点を結ぶ三角形の区域内に概ね収まっている。金平区・湘橋区を軸に榕城区へと北西方向に分布が広がる傾向が見られ、その周縁部では伯益と他の神明との混同が生じやすく、配祀ないし福德正神との合祀という形で現れることが少なくない。

福德正神祭祀圏については、汕頭市・揭陽市を核として広がっていることが確認される。潮州においては、福德正神が伯公として祀られる事例はほとんどなく、伯公廟ではなく福德祠において祀られることが通例である。潮汕の外縁に目を転じると、北方の梅州では伯公が土地神の役割を担い、福德正神と同一視されることがある。東方の福建では伯公の種別が多様であるものの、機能的には土地神に相当し、福德正神の名称が用いられる地域も存在する。また西方の深圳でも、崗辺伯公廟における福德正神の祀られていることが現地調査により確認された。これらの事実を踏まえると、伯益の祭祀圏は福德正神の祭祀圏の内側に位置し、その外側を福德正神の祭祀圏が取り囲む構造をなしていると理解できる。

さらに、両祭祀圏の地域的差異を比較検討した結果、以下の結論が得られた。

① 伯公の宗教場所について

潮州の伯公廟は規模が小さく、名称上は「廟」と称されているものの、実際の形態は「壇」である場合が多く、その大きさは神龕を納める程度に限られる。数は多

いものの体系的ではなく、村落内の目立たない場所に隠れるように存在し、地図上に表示されていない場合が多い。本地の住民でなければ探し出すのは難しい。廟名には「感天大帝廟」と冠されるものが多い。

汕頭および揭陽の伯公廟は規模が大きく、数も多く、主に水辺に沿って分布している。廟内には歴史的由来を記した石碑がしばしば見られるが、いずれも再建時に新たに設置されたものであり、史料としての信頼性には乏しい。

② 伯公廟の主神と配祀神について

潮州では、伯公は伯益であるという認識が一般的であり、神像は白髪の老人で、長剣を手にし、虎を踏む姿で表現される。配祀神は少なく、単体で祀られることが多いが、福德正神や許遜との混同が見られる場合もある。

一方、汕頭および揭陽では、伯公は福德正神であると認識されており、神像は典型的な土地神の姿で表現される。配祀は多様で、福德正神の夫人が一般的だが、伯益が併祀されることもあり、その際は黒髪の中年男性像で表されることが多い。さらに、道教や仏教の神祇が同一廟内で併せて祀られている例も多く確認される。

③ 伯公の祭神について

潮州における伯公の誕生日（伯公生）は旧暦三月二十九日である。汕頭では、伯益の誕辰である三月二十九日または福德正神の誕辰である六月二十六日が伯公生とされ、廟内の主神により日付が決まる。揭陽では、祭祀日が毎年一定しておらず、「杯筊」を用いて伯公に直接問い、確認する必要がある。

祭祀儀式には、紙影戯、線香の献供、送神・請神といった伝統的な民俗儀式が含まれる。

もっとも、伯公信仰の内容および展開は本論で取り上げた範囲を大きく超えており、今後もさらなる検討が必要である。特に、中国国内における伯公の源流に加え、東南アジアを含む華人社会での伝播および変容の過程についても、より詳細な文献調査とフィールドワークに基づく研究が求められる。

参考文献

日本語：

窪徳忠、『道教とアジアの宗教文化』、第一書房、1999 年。

二階堂善弘、『東アジアの華人廟と文化交渉』、関西大学出版部、2020 年。

二階堂善弘、「感天大帝考」、『近現代中華圏における芸能文化の伝播・流通・変容』、好文出版、2024 年。

片岡樹、「神々の落地生根——タイ国とその隣接地域における本頭公祭祀」、『華人華僑研究』(22号)、2025年。

顧涵悦、「潮州と汕頭における伯公信仰考」、『東アジア文化研究科院生論集』(14)、2024年。

顧涵悦、「潮州における伯益信仰の源流と変容」、『東アジア文化交渉研究』(18)、2025年。

中国語：

饒宗頤、「談伯公」、『南洋學報』(第八卷第二輯)、1952年。

許雲樵、『馬來亞叢談』、青年書局、1961年。

夏遠鳴、「梅州地區伯公述略」、『客家文博』(01)、2012年。

董馨、「潮汕地区之于粤闽赣的嵌入式发展」、『汕头开埠与华侨文化研究』、社会科学文献出版社、2021年。

張佑周、「試論客家民間信仰的傳承與發展」、『龍岩學院學報』(第28卷第5期)、2008年。

許原泰、「論新加坡道教信仰的起源」、『宗教學研究』(01)、2011年。

高偉濃、「東南亞華人大伯公與土地崇拜探析——以泰國為例」、『海外華人研究論集』、中國社會科學出版社、2002年。

黃钊、『石窟一徵』、學生書局、1970年。

張玉書、陳廷敬編、『康熙字典』「子集中」「人部 四画 五画」、中華書局、1958年。